

Novan Brilon al Vitro!

—エスペラント 120 年—

社団法人ニューガラスフォーラム

鈴木 恵一朗

New Brilliance to Glass!

—The 120 th Year of Esperanto—

Keiichiro Suzuki

New Glass Forum

皆さま、表題の意味がわかりますか。ラテン系の言葉を知っている方はすぐにおわかりと思います。そうです、ニューガラスフォーラムのキャッチフレーズの「ガラスに新しい輝きを」のエスペラント訳です。Vitro (ビトロ) はポルトガル語の Vidro でよくご存知の「ガラス」、英語でも Vitrify は「ガラス化する」で、お馴染みですね。Nova は「新しい」、Brilo は「輝き」で、これらにそれぞれ「を」(対格)の n を付けて Novan (ノーバン) Brilon (ブリーロン) としたものです。

「エスペラント」を知っていますかと尋ねると、たいていの方から、「世界共通語、人工語でしょう、でも今でもまだそんな言葉があるんですか?使われているんですか?」という反応が返ってきます。ですが、実に、今でも「エスペラント」はしっかり生きているのです。

今年の8月に横浜で、そのエスペラントの世界大会が開かれます。この大会には約60カ国から2000人近くが集まり、通訳の要らない国際大会を8日間にわたって繰り広げます。通常国際会議・大会では、参加人数が多てもこのように多くの国からの参加はまずありませ

ん。オリンピック(冬季)級と言ってよいでしょう。ちなみに、1998年の長野オリンピックの参加国・地域は72カ国、参加者2302人でした。しかも、学者、スポーツマン等の一定の層ではなく、一般の色々な職業・趣味の老若男女が集まって、大会テーマ(本年のテーマは「東洋における西洋:受容と反発」)についての討論、各種の専門的講演会、様々な分科会、コンサート・演劇等の芸術プログラム、多種用意されるエクスカッション等に参加し、実に多様な国際交流をするのです。もちろん参加者はほとんどすべてが自費で来ます。ですから、物価が高く、旅費もかかる日本にどれだけの人が来てくれるか、準備委員会メンバーとして心配でもあります。

エスペラントは1887年に、ポーランドで眼科医のザメンホフが創案・発表した言葉です。今年は丁度エスペラント発表120周年に当たります。1887年と言えば、ガラスの世界ではオットー・ショットが耐熱ガラスを発明した年として知られています。さて、ザメンホフは、当時、ロシア領であったポーランドでユダヤ人として生まれ、言葉が違い、宗教が違う民族同士が反目し、いさかいが絶えない状況の中で育ちました。もっとお互いの理解と寛容があれば、と願う内に、異なる民族を結ぶやさしい共通語

ができないかと考えるようになりました。エスペラントは人工語と言われますが、ゼロから人工的に作られた記号のような言葉ではなく、ラテン語を中心にヨーロッパの言葉のエッセンスを取り込み、文法、表記、発音を簡単にした言葉と言えます。従って、どんなことでも言い表せ、表現豊かであるために詩や小説等の文学も盛んとなり、エスペラント文化と言えるものも育ってきました。エスペラントには28文字のアルファベットが使われ（x, yがなく代わりにc, g, h, j, sの上に^が付いた字など）、一字一音の原則で読み方が簡単（ローマ字読み）であるため、書くときも聞いたままに書けばよいのです。また、品詞により語尾が決まっており（名詞o, 形容詞a, 副詞e）、動詞の不規則変化もなく（語尾が現在形as, 過去形is, 未来形osという様に）、極めて易しい文法となっています。

私は20代の終わり頃、エスペラントと出会いました。仕事で必要な英語とは全く違う言葉を習得して、普通であれば関わることのない人たちと交流してみたいと漠然と思っていた頃です。例えばアルメニア語を学んではどうだろうかとも思いました。しかし、その言葉を習得しても話の通じる人はごく狭い地域のごくわずかです。そんな時、新聞でエスペラントの講習会の案内を見つけました。エスペラントを話す人は世界で約100万人と言われ、世界中に薄く広



昨年夏のフィレンツェでの世界エスペラント大会
夕食会にて（筆者 右手前）

がり、主な都市には大体、エスペラントの会があります。英語ですと、かなり英語を勉強した人でも英語が母国語の人と対等に話すのが難しいことはご存知の通りです。しかし、エスペラントを使えば、どの国の人にとっても母国語ではありませんから、対等に話すことができます。各自が自分の母国語を大事にしながら言葉の違う人たちとの交流に使うことができるのです。これはエスペラントの大きな存在価値・特長と言えます。私自身にも、仕事でのドイツ出張の折、手紙を出しておいたエスペラントに初対面にもかかわらず自宅に招いていただいたり、ソ連崩壊から間もない頃、横浜市の子供都市であるウクライナのオデッサの人たちと相互訪問したことや、横浜で開いた日本エスペラント大会に招待したアジアの方々との交流など楽しく得がたい交流経験が沢山あります。昨年夏にイタリア・フィレンツェで開かれた世界エスペラント大会にも今年の大会準備を兼ねて参加し、ルネサンス文化の香りと同時にエスペラントの世界に浸ってきました。

最近、本年の世界エスペラント大会を控え、新聞等でエスペラントが取り上げられることが多くなってきたように思います。今年の1月には朝日新聞朝刊2面の「ひと」欄に世界エスペラント協会のRenato Corsetti会長（イタリア）の記事が掲載されました。氏はこの中でエスペラントの「英語と米国の関係と違って超大国の影響を受けないすばらしさ」を力説し、「イスラム社会との対話という、新たな役割を担う言語になれると考えている」とも述べています。

この21世紀が、ニューグラスにとって発展の世紀となることは疑いありませんが、エスペラントにとってはどのような世紀になるのでしょうか、興味が尽きないところです。

エスペラントについて関心を持たれた方は、是非、本年夏の世界エスペラント大会を覗きにいらして下さい。